

雨上がりのグラウンド

「おはようございます。」

「おはよう。」

ぼくは、中学生のお兄さんと校門をくぐりながら、あいさつを交わした。

ぼくは、小中一貫教育校、警固屋学園に通う六年生だ。

ぼくたち六年生は、五年生といっしょに中学校の校舎で勉強をしている。

制服を着ている中学生のお兄さんやお姉さんに出会すと、初めは少しきん張っていた。

算数や外国語活動、体育など中学校の先生と勉強する教科もある。

朝、学校に来ると、

「ソーレ。」

「ナイス。」

などと、大きな声がグラウンドから聞こえてくる。お兄さんたちが、部活動で朝の練習をしているのだ。

ぼくは、教室にランドセルを置くと、グラウンドの階段に座って、お兄さんたちの部活動の様子を見るのが、いつの間にか日課のようになっていた。

大きな声を出しながら、何本もノックをしている野球部のお兄さんたち。かっこよくラケットを振るテニス部のお兄さんたち。

（中学生になったら、どの部活に入ろうかなあ。寝ぼろしないで、朝の練習に来られるかなあ。）

などと、ぼくは、もう中学生になった自分の姿を想像していた。

でも、今朝は、雨が降っていないのに、校門をくぐっても、中学生の部活動をしている声が聞こえてこない。

（昨日、雨がよく降ったからなあ。グラウンドがやわらかくて、朝の練習は中止なのかなあ。）

と思いつながら、ぼくは、いつものように、教室にランドセルを置くと、隆司くんといっしょに、グラウンドの階段のところまで行って



みた。

すると、練習の声は聞こえなかったけれど、お兄さんたちは、グラウンドにいた。

どろどろの中、やわらかくなったグラウンドについた足あとを、古ぞうきんやスポンジなどを使って、いつしようにけんめいに整地していた。

ぼくたちは、お兄さんたちが、いつもピッチャーのマウンドやテニスコートを大切にしていることは、知っていた。グラウンドが悪いと、けがにつながるからだ。

見ると、テニスコートのはしのほうに、たくさんの足あとがついていた。傘で、文字を書いたようなあともあった。

（そういえば、昨日帰るとき、広志くんたちが、傘で絵をかいて遊んでいたなあ。）

と、ぼくは、昨日の放課後のことを思い出した。じつと、お兄さんたちのことを見ていると、

「この、足あと、小学生がつけたんじゃろ。」

「足あとを消すの手伝ってや。」

と、お兄さんたちが、口々にぼくたちに声をかけてきた。

ぼくは、隆司君と顔を見合ったまま、だまっていた。

お兄さんのやさしい口調が、だんだんきつくなってきたようにも感じた。

そのとき、八時十分のチャイムがなった。今日は、読書ボランティアの方が来てくださる日だ。お兄さんが、

「チャイムが、なったぞ。早く、教室に帰りんさい。」

と言ってくれた。

「でも。」

と、ぼくたちが困った顔をしていると、

「気にせんでもいいよ。」

「ほうよ。ここは、ぼくらがちゃんときれいにするけん。」
と、お兄さんたちが言ってくれた。

ぼくと隆司くんは、急いで教室に帰った。

休けい時間に、グラウンドに行ってみると、テニスコートの足あとは、きれいに消えていた。太陽の光を浴びて、いつもの美しいテニスコートにもどっていた。

ぼくは、隆司くんの顔を見ながら、にっこりとほほえんだ。